

# 美術教育実践のアーカイブ作成プロジェクト ～下川手集落との連携による児童画研究の学習プログラム

教育学部  
柳沼 宏寿

## 1 はじめに

本研究は、新潟県十日町松之山地区の下川手集落に保存されている大正後期から昭和初期にかけて描かれた児童画を調査・分析することによって大学の講義を「生きた授業」へ改善する地域連携の教育プロジェクトである。

美術科教育法の講義内容において、美術教育の明治から昭和にかけての歴史は、教科理念の変遷を押さえる上で重要な項目である。本プロジェクトで取り上げる資料には、絵画の他にも書写の作品や作文も含まれており、二十年以上もの作品が保管されている例としては極めて珍しい。しかもその資料に描かれている内容や評価としての朱書きから、時代的な社会背景や指導観を読み取ることができるばかりでなく、それらが集落の少年団によって集約され各家庭に回覧されていたという事実から地域ぐるみの教育体制が浮き彫りにされてきた。そのような意味で、美術教育の歴史の変遷や地域の教育力を伺い知るための優れた文化遺産であるといえよう。今回、教科の学習内容に合致している部分が多いことから授業改善にも大きく寄与することのできるものと考えプロジェクト化するに至った。授業において、これらの資料を年代ごとに整理したり、ご健在の作者から当時の教育について聞き取り調査をするなどの作業を通して美術教育史を体感的に学ばせたいと考えたのである。また、写真やビデオなどの映像機器を使った記録やプレゼンテーション作成を通して、実務的な能力の育成も期待できる。

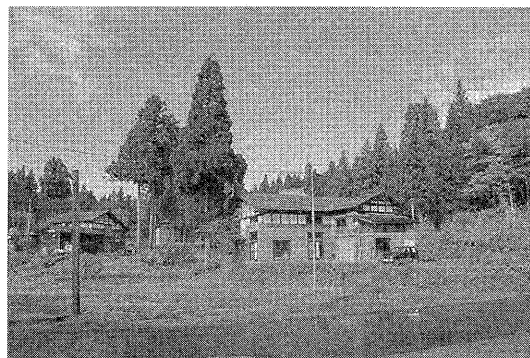
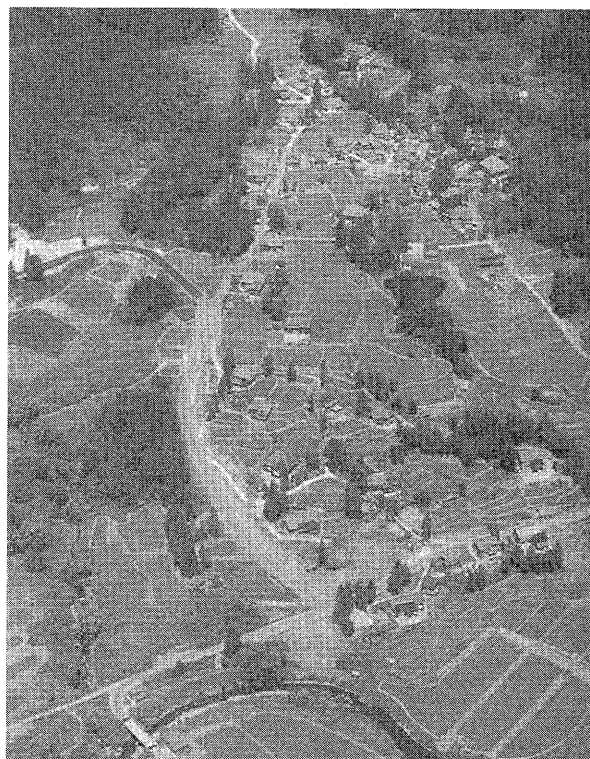
このように、授業改善を地域連携によって推進することが本プロジェクトの特色であり、社会的に開かれた中で確かな学びを得ることのできる「生きた授業」へ改善していこうとするものである。

## 2 プロジェクトの経緯と研究の構想

### (1) プロジェクトの経緯

十日町の松之山地区では、江戸時代から越道川中流域を川手と呼び、上・下に分けていたが、明治22年(1889)の町村制施行により、松口・澤口・三桶の三大字が行政上「下川手」となり現在に至っている。『松口澤口三桶誌』より)下川手集落に本資料が存在することは、当初BSN(新潟放送)のプロデューサー井

上智美氏からの情報提供によるものであった。井上氏は、終戦記念日の特集として戦前の子どもたちが描いた絵と戦争との関わりから特集を制作する意図を持っていて、その取材を兼ねながら、研究へも生かしてみてもどうかと打診してきたのである。この話は美術教育の研究としても貴重なものと捉え、即、依頼を受けると共に、下川手集落の住民へ調査の橋渡しをしようことにした。実際、現地へ赴き資料を吟味してみたところ、資料の分量、そして内容的にも美術教育研究へ十分活用していけるものと判断することができた。



今回、下川手集落との交渉の窓口である高橋清一郎氏は、本人の作品は資料には含まれていないが、本資料を何とかして集落のために役立てたいという志を抱いており、当時、作品を制作した方でいまだご健在の方々に声をかけてくださった。平成20年10月に初めて訪問した時から毎回調査活動のための場を設定して下さっている。

#### <訪問の経過>

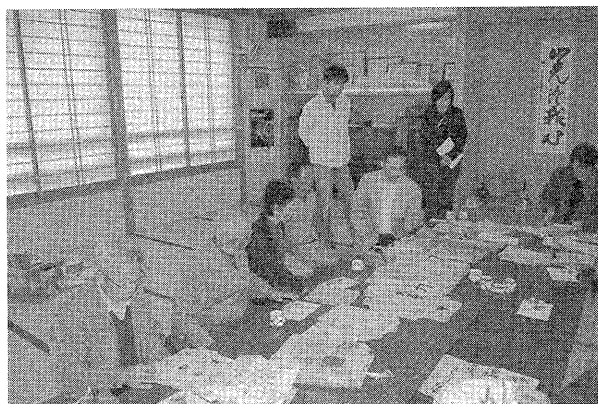
- ①第一回訪問：平成20年10月28日
  - ・BSN 取材同行、柳沼、学生<3人>、住民（5人）
  - ・作品や当時の様子について住民の方々に伺う。
- ②第二回訪問：平成21年8月4日
  - ・BSN 取材同行、柳沼、学生<3人>、住民（8人）
  - ・前半は、住民の方々へ調査の方針を伝え、全体で協議する。後半（午後）は住民の田辺さんに当時の様子についてインタビューをする。
- ③第三回訪問：平成21年9月8日
  - ・柳沼、学生<3人>、住民（6人）
  - ・資料の写真撮影と住民の方へ自分の描いた作品についてインタビューをする。
- ④第四回訪問：平成21年11月27日
  - ・柳沼、学生<1人>、住民（6人）
  - ・資料の写真撮影とインタビュー。
- ⑤第五回訪問：平成22年1月22日
  - ・柳沼、住民（2人）
  - ・資料整理、協議（本プロジェクトに関する住民への説明、外部への経過報告としてのフォーラムの開催等について）＊写真撮影するために作品を借りる。
- ⑥第六回訪問：平成22年4月23日
  - ・柳沼、学生<3人>、住民（5人）
  - ・資料整理、7月20日の集落の集会で、このプロジェクトの概要説明をすること、また、第一回展示会を11月3日の収穫祭で開催することを決定。

#### (2) 研究の構想（授業改善のポイント）

本プロジェクトは近代日本美術科教育史研究の一貫としてアーカイブを作成することを基本に据える。具体的には、大正から昭和初期の子どもの絵という文化遺産の保存と公開を最終目標に据えつつ、それを大学の授業改善を図りながら推進するといものである。具体的には以下の5点を授業改善のためのポイントとして押さえて臨む。

- ・現地訪問：日程的に都合をつけられる学生で訪問メンバーを編成する。
- ・作品整理：年代、作者、内容、評価などのデータを記録し整理する。
- ・インタビュー：調査項目にそって作者へのインタビューを行う。

- ・記録：写真記録を蓄積しデータベース化するとともに作品集を出版する。また、インタビューをビデオ撮影してドキュメンタリー映画を製作する。
- ・社会的還元：越後妻有大地の芸術祭アートトリエンナーレとの関連を図りながら、作品展を開催する。



### 3 授業改善の取り組みの成果と課題

#### (1) 現地調査に関して

今回、実際に下川手集落へ足を運んでみて感じたのは、地域ぐるみの教育が実践されていた風土である。新潟市内から2時間半かかる場所ではあるが、時間をかけて赴くことによってこそ感じられる地域性であった。朝8時半に出発して、現地で3時間程度の調査活動をして帰ってくるという内容でも丸一日の日程となってしまうため、現地訪問を授業として設定することには難しい問題もあるが、できるだけその場所性を体感してもらいたいと考え履修している学生を数人づつ分けて可能な限り交替で行くことを呼びかけた。

取り組んだ授業は、学部学生2～3年生が中心となる美術科教育法の中等Ⅱと中等Ⅲ、そして大学院の美術教育特論である。履修している学生全員を動員することは困難で、実質的に可能だったのは毎回2～3人ずつで全体の4分の一程度に止まった。訪問時の様子は写真とビデオで記録し、それを授業の中で紹介しながら拝借した資料の調査を行っていった。

<地域の人々との交渉やインタビューを通しての学生の感想>

- 遠くまで来て現地の方々からいろいろな話を直接聞くことができたことは大きな意味があったと思う。
- 集落の人々がとても喜んでくれて遙々来て良かったと思えた。
- 70年も昔のことなのに、当時のことをよく覚えていて驚いた。自分も老後になって子どもの頃のことをどれだけ覚えているだろうかと考えた。
- 私たちの質問に一生懸命答えて下さって感謝の気持ち

ちでいっぱいになった。



#### <成果と課題>

履修した学生のうち、実際に下川手集落へ訪問することができた学生は少ないが、訪問することができた学生にとっては、日常とは異なった地域において大正時代という古い資料と出会う経験は貴重であったと思う。また、住民の方々が暖かく受け入れて下さり、学生の質問にも記憶をたどりながら丁寧に答えて下さっていた。その暖かい人柄に触れながら自分達の学びを得ることができている喜びを実感することができたように思う。

また、資料を見ての疑問や研究内容について、ご健在の方々から直接インタビューしながら調査したが、学生は緊張感と使命感を持って積極的に質問しており、社会的なコミュニケーション能力を高めている手応えを十分感じさせるものであった。

課題としては、履修している全学生に現地訪問をさせることができなかったことが挙げられる。授業でこのような遠隔地に何うことには大きな困難があり、休日等を利用しての対策が望まれる。

#### (2) 授業内での作品整理と分析

これまで下川手集落へ訪問し現地でのみ調査活動を行ってきたが、平成20年10月以来4回の調査訪問を通して大学側の誠意が伝わってきたこともあって、より多くの学生に資料を見せたいこと、そしてより多くの



人手によってデータ作成をしていきたい旨を理解していただき、資料を一定期間拝借することを認めていただいた。これによって、美術科教育法中等Ⅱ・Ⅲ、そして美術科教育特論の3つの授業において資料の整理とデータ化を進めることができるようになった。

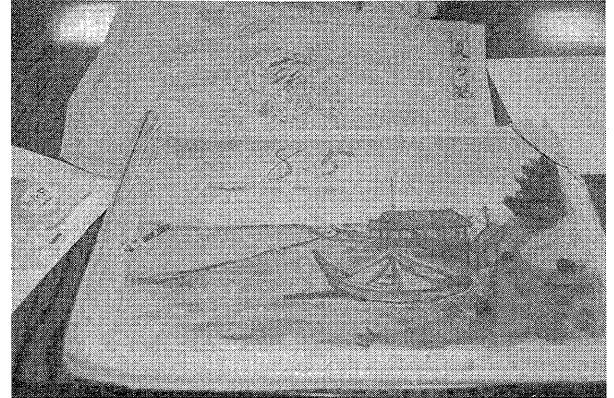
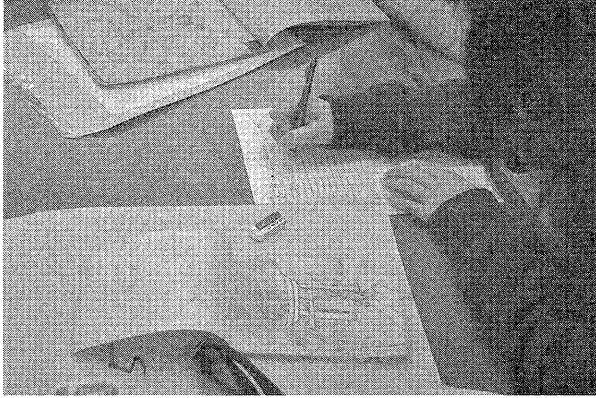
#### <資料をもとにした学習について学生の感想>

- 生の資料を手にとってみてぞくぞくした。細部まで見ることであったため、そこから現在の美術教育との違いや当時の感性を垣間見ることができた。
- 実際の資料を見ると大正から昭和の時代は、理論的な学習での知識と印象が違った。
- のらくろのような漫画やめんこなどのイラストを写しているものがあつたのは興味深かった。現代の子どもたちとも通じるものがあると思った。
- 昔の子どもたちの絵を見るのは純粋におもしろかったし、色もきれいだと思ったが、なにより手本を模写させている様子が伝わってきて当時の社会背景を感じた。
- 実際に見ることで当時の様子がリアルに感じられたが、それぞれの作品について解説してほしかった。
- 時間が足りず、自分の担当したところ以外の作品をじっくり見るができなかった。
- いろいろな題材があつておもしろいと思ったが、それぞれどんな作業工程で描かれたのかを知りたい。
- 年代ごとの分類作業は、絵の裏に記載されている年月日、作者名を調べながら行うので美術教育の学習としては、効果は期待できない。
- 分類作業している間は、美術教育の内容（指導方法や子どもの絵の傾向）についてはあまり学べないと思う。



#### <成果と課題>

美術科教育法という授業において、「美術教育史」は実際の教育活動との関連が薄く捉えられがちで、学生の学習意欲が非常に低い領域である。これまで学生の意欲関心をどのように引き出してこの重要事項を学ばせていくかが大きな課題であった。したがって、今回、その領域の生きた資料を活用することには大きな



期待を抱くとともに、その方法論を明確に構築する必要性を感じていた。学生の感想にもあるように、現物の資料から醸し出される時代的な雰囲気が学生の興味関心を引き出し、それらの整理や調査を通して美術教育における史的研究の意義が体感されていったように思われる。

課題としては、資料の数が膨大であったため、作者や制作年の不詳な作品についての調査には手間がかかり、じっくりと鑑賞し分析するという時間が取れなかったことが挙げられる。当初のカリキュラムを大幅に変更調整して史的調査に充てたにもかかわらず、調査する作業に没頭する学生が多く時間は足りなかった。

制作年	枚数	制作年	枚数
大正10年	34	昭和10年	40
大正12年	19	昭和11年	97
大正14年	51	昭和12年	6
大正15年	10	昭和13年	28
昭和2年	36	昭和14年	33
昭和3年	1	昭和15年	35
昭和4年	25	昭和16年	36
昭和5年	16	昭和17年	33
昭和7年	66	昭和18年	8
昭和8年	93	昭和19年	2
昭和9年	50	昭和27年	54

(今回の調査で分類した絵画の年代別枚数。この他に制作年不詳の作品と書写の束に収録されている絵画が百数十枚存在する。)

### (3) アーカイブ作成を通じた学び

本プロジェクトは史的な文化遺産のアーカイブ作成を目指すものだが、その方法は作品の写真撮影やインタビューのビデオ撮影などによる記録の蓄積とデータ化である。また、それらを写真集やドキュメンタリー映画といった形で内外へ発信することができれば、研究の成果としてばかりでなく、下川手の住民の方々にとっても資料の意義を確認する手立てとなり得る。そのようなビジョンを抱きつつ毎回の訪問時に撮影担当も設定して記録を積み重ねてきた。

### <アーカイブ作成を通しての学生の反応>

- 描かれたモチーフの分類作業は、見る視点が自分の中にできて良かったと思う。
- 撮影は光の取り入れ方が難しかったが、デジタルカメラを使って活動したかったのでいい経験になった。
- 映像メディアで作品制作をしたいと思っていたので、経験を積むことができて良かった。
- 調査やデータ収集をどのように進めるのかがわかってよかった。
- このような作品が今も残っているのは珍しいのでぜひ多くの人に見てもらいたい。
- 絵の撮影で、光の調節が難しい。カメラ撮影の勉強をしたい。

### <成果と課題>

美術科の学生は、映像メディアを扱うことに関しては高い関心を示しており、どもメンバーも意欲的に取り組んでいる。自身の研究として映像機器を扱っている学生以外の者も毎回交代で写真やビデオ撮影に取り組んだ。その経験を得た学生は記録の結果をフィードバックしながら自分の技術を確認し次への取り組みへ意欲を高めることができていた。

アーカイブ作成に関しては、現在、記録までは進んでいるが、未だそれを発表するために編集したりプレゼンテーションの作成をしたりする段階には至っていない。今後の授業においてその部分を取り扱っていききたい。

## 5 授業改善プロジェクトとしての成果と課題

本プロジェクトは、教科の重要事項を生きた資料をもとに構造化し学ぶ手法を授業改善の方法論として推進した。前章で述べた得られた成果を整理して提示すると以下の3項目となる。

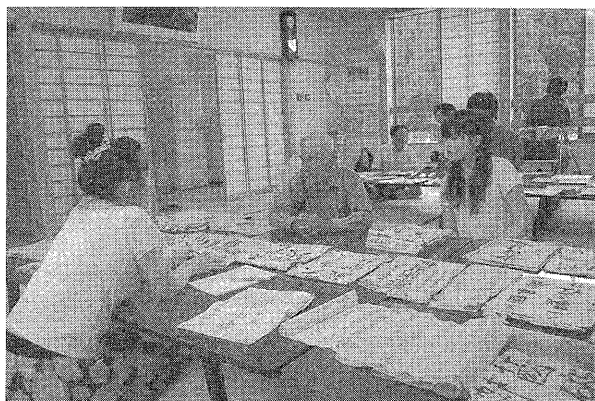
- ・美術教育史の重要事項を生きた資料を基に学習することによって意欲的に取り組むと共に、史的な事象を体感的に学ぶことができた。
- ・地域の人々との交渉やインタビューを通して、学



生として学ぶべき社会的なコミュニケーション能力を高めることができた。

- ・作品の写真やインタビューなど、映像メディアによる記録作業を通して、文化遺産に関するアーカイブ作成の手法と意義を学ぶことができた。

また、下川手集落に保存されていた資料には、絵画ばかりでなく書写や作文も含まれている。特に書写の作品は絵画よりも数量が多く質的なレベルも高いものが多い。大学院の授業である美術科教育特論の履修生には毎年書道科の学生も含まれるので、今回も2人が同行し現地の方々のインタビューに取り組みながら書教育の歴史についての調査を始めたところである。今後、書道科とも連携を図りながら下川手の文化遺産の価値を掘り起こして行きたいと考える。



最後に、今後の課題と展望について言及しておきたい。今回の調査を通して学生から次のような提案が出された。

- 当時の授業内容を現代の子どもたち相手に行って作品を比較してみてもどうか。(素材も筆や墨などの当時のものを準備して行う。)
- 美術教育から見えてくる当時の教育方針や思想を研

究することが必要だと思う。

- 当時の評価方法について研究したい。

今回の資料調査を体験することによって出されてきたこのような提案からは、学生が問題意識を抱きはじめる。しかも「研究の視点」が浮上していることが伺える。これも大きな成果の一つと言えよう。現在、調査は記録したデータ化を応用可能に整理している段階である。これからの授業においてもこれまでの研究成果を生かすと同時に、今後の展開をも扱っていくことが可能であると考えますが、その方針としては以下のように考えていきたい。

- ・講義内容に美術教育史の学習を拡大しつつ効果的に位置づける。
- ・学生の抱いた問題意識を受け止めながら学習内容を構造化していく。→時代的に焦点を絞り全体につなげる。
- ・地域の方々が参加する体制づくりが必要である。「大地の芸術祭」と提携して作品展を企画し、その運営課程において協働していきたい。

これまで二年に渡り6回の調査訪問をしてきた過程で、徐々に下川手の住民の方々との信頼関係が築かれてきたように思われる。現在では、毎回、学生が調査にきてくれるのを楽しみにしてくれるようになり、2年後の展覧会開催へ向けての希望を抱いてくれるようにもなってきた。交渉の窓口である高橋氏は大学との連携のために地域住民への働きかけに奔走して下さっており、そのような協力のおかげで授業改善への足場も固めることができた。

「大地の芸術祭」は2年後の夏である。大学が地域連携を図る成果としての作品展を目標に据えつつ、ここに挙げた方針を具体化させて美術教育としての学び(美術教育のリテラシー)を構造化していきたい。